

(9) 透析患者における降圧薬使用と生命予後の関係 (図表9)

論文の概要

2005年末に週3回の維持血液透析を受けていた患者を対象として、降圧薬使用有無と生命予後との関連を検討した報告である。

タイトル：Higher survival rates of chronic hemodialysis patients on anti-hypertensive drugs

著者：Iseki K, Shoji T, Nakai S, Watanabe Y, Akiba T, Tsubakihara Y

収載：Nephron Clin Pract 2009；113（3）：c183-190

対象：2005年末に週3回の血液透析を施行されていた患者のうち、年齢が20～89歳で降圧薬などの値が得られた163,668人

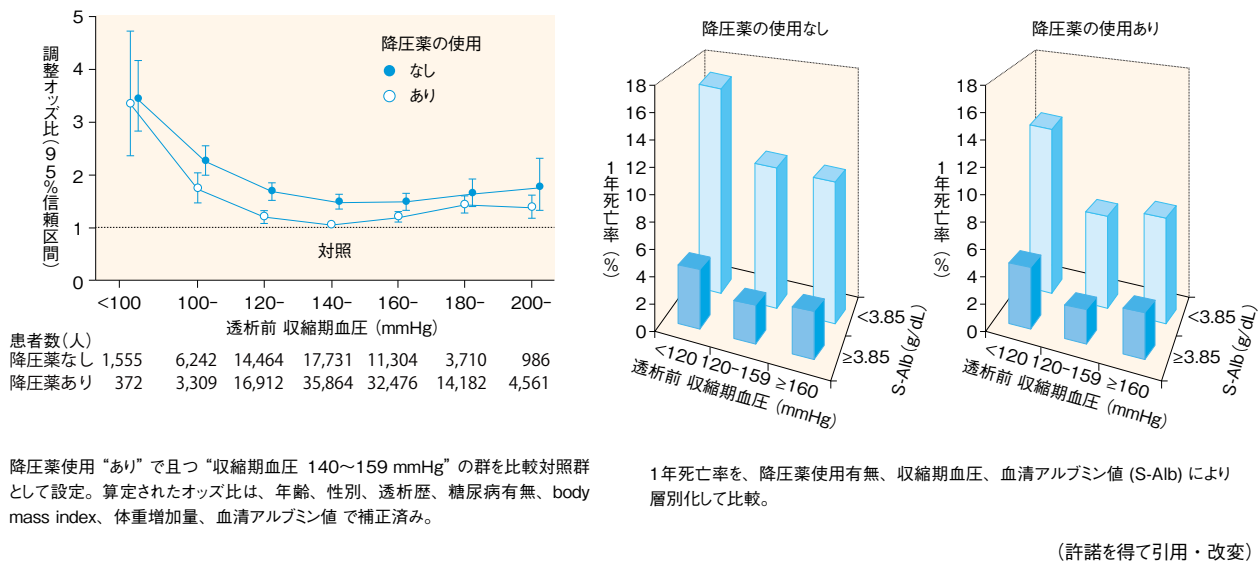
要因：透析前の収縮期血圧 (mmHg) と拡張期血圧 (mmHg) について、降圧薬使用有無で層別化 (収縮期血圧、拡張期血圧とも7層に層別)。

これとは別に、降圧薬使用有無、収縮期血圧 (120未満、120～159、160以上)、血清アルブミン (3.85g/dL未満、3.85g/dL以上) の3指標で計12層に層別化した死亡率についても比較。

アウトカム：1年間の全死亡

結果：収縮期血圧と拡張期血圧のいずれにおいても、降圧薬使用群で非使用群より死亡リスクは低い結果であった。降圧薬使用有無、収縮期血圧そして血清アルブミンで層別化した死亡率比較では、収縮期血圧や血清アルブミン値によらず降圧薬使用群で死亡率は低い傾向が認められた。降圧薬使用による良好な生命予後は、レニン-アンギオテンシン系抑制薬使用群で顕著であった。

降圧薬使用と生命予後の関係



解説

血圧や栄養指標を考慮してもなお、降圧薬使用群の方が非使用群よりも死亡リスクが低いことを示した研究である。一般人口では高血圧は心血管死亡の危険因子として認知されているが、透析患者においては食事摂取量の多い患者 (すなわち栄養状態の良い患者) ほど血圧が高い傾向があり、その一方で心不全や低栄養を合併した患者で血圧が低い傾向があることから、血圧や降圧薬の使用有無と予後との関係を論じることは困難であった。しかしこの研究により、血圧値や患者の栄養状態を考慮してもなお、降圧薬の使用が低い死亡リスクと関係することが示された。

本検討は、日本透析医学会の血液透析患者における心血管合併症の評価と治療に関するガイドラインに引用された。